

## 入選

「昔の話を伝えていこう!」

鳴門教育大学附属中学校一年 竹内佐那

私の家は農家で、毎年米作りをしている。私ももう中学生になったので、田植えをするときに手伝いをした。その時に祖父が「昔と違って、最近の米作りは楽にできて本当に良いなあ。」と言っていた。そのことを聞いた時、昔はどんな風に米作りをしていたのかが気になったので、昔から徳島市で農家をしている七十六歳の祖父に話を聞いてみることにした。

祖父が昔と今で一番違うと言ったのは、やはり前に言っていた通りに作業をする人数だった。昔は近所の人に手伝ってもらったり、作業する人を雇ったりして約五から六人で米作りをしていたらしい。でも今は、中心的に米作りをしているのは、私の両親と私のお祖父との三人なので、昔に比べたら少ないことが分かった。作業する人数が減ったのは、米作りのための機械が流通してきて、そこまで人数がいらなくなったからなのではないかと推測した。その考えを祖父に話すと、昔の米作りのやり方を詳しく教えてくれた。昔は、一つの田んぼを四人組で田植えをしていたそうだ。今のように機械が無かったため、手で一つ一つ植えていったそうだ。今は六反ほどの田んぼだが、昔は二丁ほどの大きさがあって、手で植えていたので、田植えにたくさん時間がかかったらしい。ほぼほぼ休みが無い中、秋まつの時だけは休けいすることができたので、祖父はいつも秋休みを待っていたと言っていた。

昔、機械を使わず、田植えをしていた時には、真つすぐに等間隔に稲を植えるために、はしごのような形をした定規で距離を測り、植えていたそうだ。今は田植え機があればそれをすべて自動でできるので、本当に便利だと思う。田植えが終わっても、昔はずっと大変だった。田んぼに毎日水をいれなければいけないのだ。今はポンプがあつて、スイッチを押せばモーターが地下水を吸い上げて水を入れてくれるのだが、昔はもちろんそんなものではなく、水車で水を汲み上げていたそうだ。水車も、自動で動くわけではないので、子供が水車を動かすために足でふんでいたそうだ。すべての田んぼに水を入れていくのには、長い時間がかかったので、本を読みながら水車を動かしていたと言っていた。昔は、子供にも手伝わなければいけない仕事があつて、特に祖父は長男だったため、仕事が多かったそうだ。

そして、何よりも大変だったのが稲かりだそうだ。田植えをした時よりも

稲が成長しているため、重くなっているので、確かに今でも田植えよりかは稲かりの方が大変だ。今は稲かりは、コンバインという機械を使っている。でも昔はやはり機械が無かったので、のこぎりで稲を刈って、何本かの稲を束ねて天日干しをしていたそうだ。そして天日干しができたら、脱穀機を使って脱穀をして、うすで精米をしていたそうだ。こんなに大変なことを今はすべて機械ですることができるよう。本当に今は便利になっていると実感した。

稲かりが終われば、次の年に田植えをする準備で田んぼを耕さなければいけない。今は、トラクターという機械を使えば簡単に耕すことができる。でも、祖父が田んぼを耕す時は馬を使っていたそうだ。このことを聞いた時、私はすごく驚いた。今は馬が見れるのは動物園に行つた時くらいなのに、昔は馬や牛を飼っていたそうだ。飼うなんて今考えれば、ありえないことだと思っていると、その話を聞いていた私の父が、「お父さんが子供の時にも近所でまだ馬を飼っているところがあつて、馬の鳴き声が聞こえていたよ。」と言っていて、もっと驚いた。この話は、祖父に聞いた話の中で一番驚いたことだ。

田んぼには、肥料もまかななければいけない。昔は飼っている馬や牛のフンを肥料としてまいていたそうだ。そして、田んぼにできたわらを馬や牛などのエサにしていたそうだ。その他にも、田んぼにれんげという花を植えて、その花も栄養にしていたそうだ。今は、化学肥料を使っているもので、そのようなことはしていないが、絶対に昔の方が環境に良かったらうと思った。その証拠に、昔は田んぼの横にある水路には蜚が飛んでいたそうだ。蜚が飛んでいたということはよっぽど水がきれいだったのだらうと思った。

今は機械ができて、簡単に米作りをすることができる。なので祖父は、「今の農業は昔から考えれば遊びのようなものだな。」と言っていた。確かに今の方が楽に作業をすることはできるけれど、昔は蜚がいたように、昔のやり方もいい所はたくさんあると分かった。機械に頼りすぎたら、そのうちすべての工程を機械ができるようになるかもしれない。でも、機械が作るより、農家の人が、精一杯頑張つて気持ちを入れて作られたお米の方が絶対においしいと思う。なので、これからは、すべてのことを機械に頼るのではなく、昔からのやり方も残していくのがいいと思った。昔の良さが分かつて、とても勉強になった。